

### 3. ラスベガスのカジノに関する実態調査

#### (1) ネバダ州(Nevada)のカジノ規制の概観

ネバダ州は、1774年の独立宣言の際の13州には入っていなかったが、1848年にリンカーン大統領時代のアメリカがメキシコからカリフォルニアの割譲を得たときに、アメリカ36番目の州となった。以後、1840年代の後半ごろから、カリフォルニアのサクラメントのゴールドラッシュが始まり、1849年には、金鉱ブームに駆けつけた80,000人以上の人々がフォーティナイナー(49年組)と呼ばれ、11年後には、ゴールドラッシュは、カムストックロード(現在のネバダ州ヴァージニア・シティ近郊)に移り、このあたりの金銀産出量が、全米の60%にも達したのである。1861年にブキャナン大統領がネバダ・テリトリーとして署名し、金鉱とサンフランシスコに近いカーソンシティがキャピタルとなっている。ラスベガス・テリトリーはアリゾナの一部で、1867年に州境をコロラド河で区分することで現在のネバダ州の形となったのである。

ラスベガスの開発は、鉄道会社の分譲オークションで始まったと言われている。1910年には、婦人団体の圧力でギャンブル禁止法が成立しているが、1931年、フーバーダム(現ブルダーダム)の建設で道路がつくられ、大勢の労働者が集まり、非合法のギャンブルが大流行し、さっぱり効果のないギャンブル禁止法が見直され、あらためて合法化されたのである。

フーバーダムは、完成までに7年を要したが、工事中から完成後も観光客が絶えることなく、ラスベガスは、ギャンブルのできる観光地として、次第にスポットを浴びていくこととなった。

1941年～45年の戦争の間も、数々のスターを生み出す舞台装置が作られていった。1946年にベンジャミン・シーゲル(バグジーBugsy)がフラミンゴをオープンした話は、映画化され、有名になった。その後、毎年、超一流のホテル・カジノがお披露目され、新しいプランが実行され、エンターテイナーにとって、ラスベガス公演を行うことが一流と呼ばれるステイタスの証明にもなっていた。

1950年代は、デザートイン、エルドラド、ホースシュー、サハラ、サンズ、リビエラ、フレモント、ハシェンダ、トロピカーナ、スターダスト、デューンズ等が続々とオープンし、エルビス・プレスリーやエディ・フィッシャー・そしてライザ・ミネリ等も出演した時代であった。

1960年代は、テレビ時代の到来とともに、コンベンション・センターも完成し、空港も拡張され、各ホテル・カジノがスポーツ・トーナメントに力を注いだ。そして、アラジン、フォーキーン、シーザースパレス、サーカスサーカス、ランドマーク等が次々にオープンし、1966年からハワード・ヒューズが、デザート・インに陣取りラスベガスの買取りとマフィアの追い出しを図った時代でもあった。

ネバダ州のGaming Control Board(ゲーム管視局)やGaming Commission(ゲーム委員会)が

力をつけ、カジノ・ゲームの公正な運営と監視、ライセンス申請者の厳正な調査、営業権の管理という宝刀を持ったのはこの時代であった。

ギャンブルがあるだけで全米一の観光客誘致が楽にできたわけではない。ラスベガス全体が絶えずリノベーションし、又より新しいエンターテインメントを提供し、競争に勝ち残らねばならず、1980年から超大型の投資が続いており、州政府発表のゲーム収益は、膨大なものとなっていったと言われる。

[注]ここの記述は、前掲書『カジノ白書』と『International Casino Law』を参考にした。

## (2) カジノと共生したラスベガスの光と陰の歴史

我々がアメリカにおける上記の実態調査のためラスベガスから帰国した翌日の3月19日付朝日新聞(夕刊)は、「大当たりに大きなおまけが・・・『米ラスベガスのカジノで昨年1月、過去最高額と言われる3,500万ドル(約40億円)を当てたシンシア・ジェイ・ブレナンさん(38)は、普通の人では考えられない運命の変転を味わった。カジノのウェイトレスだったブレナンさんは、ラスベガス市内のホテルで一回3ドルのマシンに挑戦した。いつもは21ドル負けるとやめていたが、この日は6ドル分追加し、最後に大当たりが出た。ところが、その6週間後、酔っぱらい運転の車に激しく追突され、同乗していた妹を亡くし、彼女も下肢マヒの後遺症を負った。』」と報じていた。

加藤が、『組織犯罪の研究—マフィア、ラ・コルザ・ノストラ、暴力団の比較研究—』(成文堂・1992年・社会安全研究財団委託研究)を書くにあたり、1988年夏、ラスベガスを訪れた際、日本の暴力団が2、3ヵ所のカジノを買収したとの情報を得た。当時のラスベガスは、上記のウェイトレスのように女性が一人のんびりとゲームを楽しみ、気がついたらアメリカン・ドリームの中にいたという雰囲気ではなく、暴力団やマフィア等が出入りしたり、カジノを買収して経営に乗り出す等で殺伐とした雰囲気であった。

しかし、10数年振りに訪れたラスベガスはもうすっかり変わってしまっていた。ラスベガスの中心部にあるホテルはいずれも部屋数2000~5000室の巨大ホテルばかりである(今ではラスベガスのホテルは6万室を超えている。そして、それぞれのホテルが大きなテーマ・パークになっており、ショッピング・モールがあって、一流の店が入っている)。そして、それぞれのホテルがオリジナルなテーマに合わせて、建物の外観、内装、設備、カジノの雰囲気やサービスにいたるまで至れり尽くせりの演出を凝らしている。また、最近のラスベガスは、家族連れもターゲットにするようになり、ホテルには託児所や子供向けの遊園地等も備えられている。さらに、犯罪学者にとっては、ラスベガスは世界最大のギャンブル都市だが、各ホテルは、防犯カメラや警察OB等の警備員を多数配置し、セキュリティに多額の資金を投入した結果、今では犯罪の最も少ない都市になったとさえ言われている点は大変興味をそそられるのである。

### (3) インターネット・ギャンブルとラスベガス型カジノ産業の死闘

ところでアメリカ合衆国におけるわれわれの調査は、ラスベガス型カジノ(これは合法的なので「ゲーム」又は「ゲーミング」と言われる。)にInternet Gamblingがどの程度の影響をおよぼしているかについて調べることを目的としていた。

インターネット・ギャンブルがネバダ州のカジノに影響するかどうかを検討する前に、まずネバダ州では、カジノで一番のドル箱となっているのはスロット・マシンであることを紹介しておかなければならない。

しかし、インターネット・スポーツ賭博というとな国的には大きな問題になる。例えば、前述のようにスーパーボウルとか、大きなスポーツのイベントでは、膨大な賭け金が動き、弱小のカジノ場には相当大きな影響があるという報告も出されている。

今回の調査から全体的にいえることは、例えば、ラスベガスに行ったときに、カジノでプレーするのはラスベガスで過ごす全体の10%か20%くらいの比重になっていて、あとはエンターテインメントで過ごすというか、街全体がレジャーランド化していて、非日常的な時間と空間を体現して、まさにバカンスを家族とともに楽しみ、それを通してギャンブルをすることの羞恥心とか、後ろめたさといった、ギャンブラーにあつたコンプレックスみたいなものはなくなってきている。女性も子供も来ていて、非常に健全ムードで、しかも一流のエンターテイナーが来て、ほとんどの部分は健全娯楽という雰囲気になっている。

各ホテルには、プロデューサーがいて、各ホテルや各カジノの巨大テーマ・パークを作り、共存共栄でやっている。したがって、ネバダではインターネット・ギャンブルというものからはあまり影響はない。しかし、ワシントンDCで聞いた結論というのは、小さな国の小さな島で、パソコン1台あれば大金持ちになる可能性もあるので、アメリカでも、ミシシッピーとか、アトランティック・シティのようなところは、ある意味ではカジノ経営に行き詰まり、閑古鳥が鳴いていて、なんとかお客を呼ばないといけないような発展途上のカジノをもっている州にとっては、インターネット・ギャンブルというのは、非常に大きな競争相手になる。アメリカのカジノ解禁の政策として、マイノリティの人達にカジノを経営する特権を与えていたのだけれども、そういった人々にとっては、インターネット・ギャンブルというのは非常に驚異になると思われる。FBIによれば、ネバダ州は結構上手くいっている話だが、アトランティック・シティはどうかという話のときに、経済の状況は良くなったのだけれども、犯罪率がすごく高くなったと言われている。